

# 2025 年度日本地理教育学会 5 月例会

1 期日 2025 年 5 月 18 日（日）13:00-15:00（9:30~12:00）

申し込みリンク <https://forms.gle/wGdU4coA6VJWrxxXA>

2 会場 筑波大学附属小学校 3 階社会科教室（文京区大塚 3-29-1）

3 テーマ「未来志向の小学校社会科改訂に向けて」

4 主催 日本地理教育学会集会委員会

5 プログラム

9:30~11:10 寺本潔名桜大教授の筑波大学附属小学校第 4 学年児童対象の出前授業「社会科を窓に次世代に培いたい観光の学び—観光客目線からの思考を通して東京都の魅力に気づく—」の授業参観（任意）。

特別授業「社会科を窓に次世代に培いたい観光の学び—観光客目線からの思考を通して東京都の魅力に気づく—」

1 限目：「地域の産業を元気にする観光の役割」を学びます。日本観光振興協会が作成し 1 『初めての観光副読本』（カラー20 ページ）を教材として使用し、観光がこれからの日本や地域を元気にする大事な役割を担っていることを学びます。

2 限目：社会科単元「わたしたちの東京都」の拡大版として「旅行客のニーズに応じた東京観光プランの立案」を 4 年生なりに挑戦します。東京都の観光パンフレットの読み取りとその活用について提案します。

11:20~12:00 研究協議会

13:00 5 月例会

司会進行 山本隆太（静岡大・集会委員長）・大高皇（跡見女子大・集会副委員長）

会場校より 由井菫健（筑波大附属小）

13:10 趣旨説明 田部俊充（日本女子大・会長）

13:20 報告（各 15 分）

報告 1 井田仁康（筑波大学名誉教授）：小学校社会科の現状と課題—教科間の連携と小学校から高等学校までの一貫性—

報告 2 村山朝子（茨城大学名誉教授）：小学校社会科における『世界』と『日本』：アンケート調査から見た考察とカリキュラム改善の提案

報告 3 吉田和義（創価大（非））：地図活用から見た小学校社会科の課題

14:10 総合討論

14:40 コメント：飯塚耕治（春日部市立豊野小学校）

14:50 総括：秋本弘章（獨協大・常任委員長（副会長））

6 企画趣旨

魅力的な未来志向の小学校社会科とするために、小学校社会科改訂のアイデアを議論したい。まず、1998（平成 10）年と 2008（平成 20）年の 2 回の改訂の学習指導要領作成協力者として参画し、現在は小中高において精力的に観光教育の授業を重ねている寺本潔名桜大教授の小学校社会科第 4 学年の児童対象の出前授業の授業参観を行い（任意）、地図活用を核とする未来志向の授業の可能性を考える。

5 月例会では、日本地理学会をはじめとする地理関係諸団体の動向やアンケート調査、未来志向の実践から小学校社会科の方向性を検討したい。小学校の学習の検討を踏まえて、中学校社会科地理的分野、高等学校地理総合、地理探究の改訂につなげたい。

## 報告1 井田仁康（筑波大学名誉教授）：小学校社会科の現状と課題—教科間の連携と小学校から高等学校までの一貫性—

小学校は、身近なことから世界、宇宙の様々なことに関心・興味をもち、これからの人生の基盤となる知識や学び方を学習する。小学生の頃に抱いた夢を実現化しようとして人生を歩んでいる人は少なくないであろう。空間的にいえば、小学生の関心・興味は、必ずしも身近なことから世界へと同心円的に拡大するわけではなく、その時々々の学習によって、様々なスケールや場所について関心・興味をもつといえよう。

小学校で英語が導入され、他の教科でも日本のみならず、世界が扱われる。一方で、こうした教科により、世界のことや国際理解、持続可能な社会・地球に関心・興味をいざいでも、こうした学習が教材化されている教科とこうした内容を追究できる社会科（地理）で学習の連携が図られておらず、学習者の高められたモチベーションが維持できなくなる。後日（数年後）社会科で世界や国際理解を学ぶ機会があっても、すでに学習者のそうした内容を追究しようとする熱は冷め、さらには過去に学習したことと同じの繰り返しにとらえられ、学習するモチベーションは上がらない。このことは学習者にとっても、効果的な教育という観点からもみても好ましくない。

小学校は、高学年で教科担任制となる傾向はあるが、学級担任制であり、どの教科でどのようなことを学習しているのかの把握はしやすく、教科による学習内容を関連付けさせることも可能である。特に、小学校における世界の学習については、教科によって分断されることがないように、柔軟なカリキュラムがつけられるような制度や教員の能力がもたらされよう。同時に、小学校のみならず小学校から高等学校までの一貫教育としての世界的視野を獲得する学習の改善を考えていかなければならない。

## 報告2 村山朝子（茨城大学名誉教授）：小学校社会科における『世界』と『日本』—アンケート調査から見た考察とカリキュラム改善の提案—

現行社会科は、目標に「グローバル化する国際社会に生きる」資質・能力の育成と、新たに「グローバル化」を冠した。しかし、この目標への小学校社会科の対応は十分とは言えない状況である。令和4年度学習指導要領実施状況調査結果には、「内容により基礎的な知識や技能の定着に課題があると考えられる」とあり、改善対象として「地理的環境の学習」が例示されている。内容について具体的に示してはいないが、そもそも「世界」や「外国」の地理的環境の扱いは極めて浅く、喫緊の課題として改善が求められる。

本報告では、児童へのアンケート調査結果から、現行社会科の課題とその改善策について考察する。世界や外国の取扱いを中心に、他教科も含めて検討する。小学校社会科では、世界や外国は日本とのつながりや産業との関わりという限定的な観点から断片的に扱われ、世界の地理的環境、多様性の理解には不十分である。他教科では海外の様々な事象が題材として扱われるものの、体系的な知識習得や地域理解を目的としていない。こうした状況を見ればどのよう捉えているのか、彼らの「世界」や「外国」に対する知的好奇心や学習意欲はどのようなものなのか。選択肢回答や自由記述は、カリキュラム改善の方向性を示唆する。

小学校段階から社会科において「世界」や「外国」についての学習機会を拡充することは、日本の国土や文化の理解に不可欠である。自らの国を相対視し、自らの立ち位置を俯瞰する視座の獲得は、グローバル化する国際社会でグローバルに生きる資質の基礎となる。

### 報告3 吉田和義（創価大（非））：地図活用から見た小学校社会科の課題

小学校社会科における地図の活用は第3学年から始まり、これは以降の地図学習の基礎となる。小学校における地図の活用が、段階的、系統的に進められることが望まれる。令和4（2022）年度学習指導要領実施状況調査の結果を基に、小学校社会科に関して「地理的環境の学習において基礎的知識や技能が定着する指導」の充実を図ることが指摘されている。

小学校第3学年に「身近な地域の学習」が位置づけられ、学区を中心とする身近な地域を観察・調査し、地域の特色について地図を活用してまとめる授業が行われてきた。しかし、現行の学習指導要領では、内容の取扱いにおいて「自分たちの市」に重点を置くよう配慮することと示されたため、身近な地域の授業時間数が減少し、野外での観察・調査を実施しない事例が見られる。

第3学年は子どもの知覚環境の発達過程では、ルートマップの段階からサーベイマップの段階に発達し始める時期と位置づけられる。サーベイマップへの発達には、野外における場所体験の充実が欠かせない。社会科において実際に野外に出かけて見るという観察・調査の活動を位置づけ、地図の活用とあわせて、社会的事象の客観的な位置を捉えることが重要である。

地図帳に関しては現行の学習指導要領から第3学年で給与され、はじめて地図帳を開くときから、その活用の技能の基礎を習得できるようにすることが必要である。社会科に地図帳活用のための単元を設定し、索引の活用方法を含め、地図技能の初歩を取り上げ、地図活用を進めることが望まれる。

#### 文献

吉田和義（2018）『手描き地図分析から見た知覚環境の発達プロセス』風間書房

Yoshida, K. (2024) : Development of Children's Environmental Perception and Primary Geography Education in Japan. Zeitschrift für Geographiedidaktik (Journal of Geography Education ) 51(4) 190-203.